様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年５月３１日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９７３０４３４
研究課題名（和文）：大学生に対するコミュニケーション教育の効果研究

研究課題名（英文）：An effect study of the communication education for the university students

研究代表者
吉岡　和子（YOSHIOKA　KAZUKO）
福岡県立大学・人間社会学部・講師
研究者番号：30448815

研究成果の概要（和文）：本研究では，「気づきの体験学習」と「乳幼児や高齢者との交流」を核とした“ヒューマン・コミュニケーション”授業の効果を質問紙調査で検討した．対人関係やコミュニケーション能力及び自己受容の育みが促進されていることが確認された．体験的，実践的に学ぶ“ヒューマン・コミュニケーション”授業は，一方通行的な授業ではないため，学生にとって新鮮で，青年期にある学生の自分づくりや対人関係づくりの支援になっていることが推察された．
研究成果の概要（英文）：The present study examined the effect of the "human communication" class by inventory survey. It was confirmed that bringing-up of the personal relationships, communicative competence and self-reception were promoted. Because a "human communication" class is experience-like and practical, this class is fresh for a student. Therefore it was guessed that this class was supported the self development and constructing good interpersonal relationship.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	0	1,000,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	300,000	2,300,000

研究分野：心理学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：コミュニケーション教育　大学生　効果研究

１．研究開始当初の背景
（1）国内の研究動向
一宮ら（*1）は，大学新入生の精神状態の変化を最近 14 年間の質問表による調査の結果から検討し，人づきあいの中で緊張し，友人をうまく作れずに孤独感を持っている学生が最近急速に増えていることを指摘している．また，学生相談を通して，繁田（*2）は，過度に人間関係に敏感になり，神経症的な症状を表す学生の増加を指摘している．このように，現代の一般大学生のメンタルヘルス支援の１つとして，対人関係スキル，コミュニケーション能力の向上が重要であると思われる．

（2）着想に至った経緯
①友人関係における自己表出に関する研究を通して

申請者は，1999 年～現在まで，青年期，特に大学生を対象にして，友人関係における自己表出に関する研究を行ってきている．研究を通して，友人関係における自己表出には，自己受容感を高めることが大切であることを見出してきた．その自己受容には，「他者への貢献」(*3)，つまり高塚（*4 *5）のいう「役立ち感」を高めることが必要であると思われる．高塚は，約 10 年前から，高校の人間関係づくりの授業の一環として，保育園の園児や高齢者施設利用者の人との関わりを持たせる試みを行い，現在は医学部教育においてコミュニケーション教育を行っている．人は誰でも「人から見つめられたい」「自分の話をきいてもらいたい」「大切にされたい」「認めてもらいたい」と感じている．交流を通して，自分が必要とされる体験をすることで，コミュニケーション能力や対人関係の在り方によい変化が生じているという．このように，生活の大半を過ごす学校の授業の中での工夫が，現代の青年たちには必要になってきていると思われる．

②アサーション･トレーニングを中心としたコミュニケーション教育を通して

申請者は，自分も相手も大切にする自己表現を学ぶアサーション・トレーニング（*6）を中心としたコミュニケーション教育を，看護学生に対する研修（2001～2004）や教員養成系大学の講義（2003～2006），さらには，ひきこもり・不登校支援などで行ってきている（*7）．

また，効果研究（*8 *9）を通して，学生のメンタルヘルスや自己効力感の向上とコミュニケーション教育の関連を見いだしてきている．

（3）本研究の位置づけ

心理臨床実践活動だけでは十分に対応できない現状があり，学生相談の機能を一部の学生への援助から一般大学生を含む大学教育の一環として位置づける必要性がある．講義の中で，自分をどう出すか，相手とどう分かち合うかというコミュニケーションスキルを再開発することが学生のメンタルヘルス対策や予防，さらには支援になるように思われる．

本研究は，これまで申請者や共同研究者が実践研究してきたコミュニケーション教育の効果を，質問紙調査を中心に検討する臨床心理学的実践研究である．

*1 大学新入生の精神状態の変化 - 最近 14 年間の質問票による調査の結果から - ，一宮 厚・馬場園 明・福盛英明・峰松 修，精神医学，45，959 - 966，2003.
*2 大学生のライフスタイル　学生相談を通してみられる若者の心理 - 孤独と不安からの逃避 - ，繁田千恵，教育と情報，504，12 - 15，2000.
*3 自己受容に関する一研究：様相と関連要因をめぐって，大出美知子・澤田秀一，カウンセリング研究，20，128 - 137，1988.
*4 自分が好きになっていく，高塚人志・五木田 勉，アリス館，2003.
*5 いのちにふれる授業―鳥取・赤碕高校の取り組み，高塚人志，小学館，2004.
*6 アサーション・トレーニング-さわやかな＜自己表現＞のために，平木典子，日本・精神技術研究所〈発行〉 金子書房，1993.
*7 不登校や引きこもりの家族に対するアサーション・プログラムの開発－「家庭内の人間関係づくりセミナー」における効果の検討－，吉岡和子・太田あや乃・田中克江，九州大学心理臨床研究，25，105－111，2006.
*8 看護学生に対する合宿型アサーション・トレーニングの実践的研究－自己効力感尺度による効果の検討－，田中克江・吉岡和子，自然と文化，31，17－23，2004.
*9 介護福祉士養成におけるコミュニケーション教育－これまでの養成プログラムの検討－，田中克江・毛利史枝・知念正剛・吉岡和子，自然と文化，32，31－40，2005.

２．研究の目的

本研究では，コミュニケーション教育を実践し，プログラムの前後やフォローアップで質問紙調査を実施し，その効果を検討する．対人関係能力が問われる職業を目指す学生を対象とするため，本人のメンタルヘルス支援に加えて，職業的能力の向上にもつながると考える．

さらに，コミュニケーション教育をよりよいものに改良していくことを目指す．

３．研究の方法

研究協力者（鳥取大学　高塚人志准教授）が実践してきた「気づきの体験学習」と「乳幼児や高齢者との交流」を核とした“ヒューマン･コミュニケーション授業”の受講生（医学科生 1～2 年：必修授業）・医学科以外の学生（以下，一般学生：選択授業））を対象とした．

（1）授業内容

①気づきの体験学習

「する・みる・考える・わかる」の 4 つのステップを繰り返すことで学習が深められる．「どうしてそうなったか」を自分自身に問いかけ考え，得られた気づきによって自らが行動変容していけるように支援する体験学習．

②乳幼児との交流
「気づきの体験学習」で気づき学んだことを試す直接体験の場として位置づけられる．
0～3歳の乳幼児と1対1で半年間にわたる継続的な関わりを体験することは，自らが心を開いて乳幼児たちの“いのち”にふれることになり，「人として」「医師として」貴重な体験となる．時には，自分の思うようにならないこともあるが，「どうしてそうなったか」「次にどうしたらいいか」とふりかえり，決してあきらめることなく粘り強くパートナー（乳幼児）に寄り添い，気持ちを表情や言動から推し量り，必死になって自分のこととして考え関わりをもつことを通し，学生たちが「人間性」や「コミュニケーション」力をつけていくことをねらいとしている．
※医学科1年次生の授業は，Table1に示すように，『乳幼児との交流』が4回×2回含まれている．医学部以外の学生の授業では，『気づきの体験学習』のみが90分×15回で行われる．医学科2年生は，前期に，高齢者との交流が行われる．

Table 1

医学部医学科１年次生（前期）の取組の概要

■気づきの体験学習
■交流準備（１コマ９０分×２）×５

■乳幼児との交流（１コマ９０分×２）×４

■ふりかえり
■気づきの体験学習（１コマ９０分×２）×１

■乳幼児との交流（１コマ９０分×２）×４

■気づきの体験学習
■ふりかえり（１コマ９０分×２）×１

４．研究成果
（1）平成19年度
分析対象者は必修科目として受講した医学部2年生75名（4月と7月），自由選択で受講した医学科以外の学生30名(4月と7月）とした．質問紙は，研究協力者（福岡医療短期大学　田中克江教授）と既存の尺度を組み合わせて作成したQOLL(Quality of Life & Learning）を用いた．QOLLは，１）簡易版・大学生生活チェックカタログ45:大学生の生活の質（Quality of Student Life: QOSL）の実態を把握する尺度（峰松ら，2002），２）九州大学コミュニケーションスケール（峰松ら，2001），３）自己受容尺度（大出・澤田，1988），４）家族機能測定尺度（草田・岡堂，1993）から構成された．
共通点として，QOSL尺度の「社会的関係」，自己受容尺度の「他者への貢献」が高まっていた．医学部学生は，コミュケーションスケールでは有意に得点変化したものがなかった（Table2～4）．2年次のみの変化をみているため1年次ほどの大きな変化がなかった，あるいは医学部学生の特徴である両方の可能性がある．また，医学部学生は，1年間の乳幼児との交流に加え高齢者との交流があったため，コミュニケーション以外では，さらに変化が見られたと考えられる．一方，一般学生は自由選択で受講しているため，「気づきの体験学習」のみでも効果がより大きいと思われる．

Table 2　医学部学生QOSL得点変化
（有意・有意傾向のみ）

下位因子(得点)	2年次 4月	2年次 7月	
社会的関係(0－18)	10.09	10.79	p<.01
生きがい(0－12)	7.04	7.64	p<.05
大学への満足感(0－9)	5.11	5.43	p<.05
大学生活の全体的充実感(0－6)	3.49	3.79	p<.10

Table 3　一般学生QOSL得点変化
（有意・有意傾向のみ）

下位因子(得点)	授業前	授業後	
自己効力感(0－27)	13.88	15.92	p<.05
社会的関係(0－18)	10.96	13.04	p<.001
正課外活動(0－12)	2.04	3.88	p<.001
生活・学習環境(0－12)	7.83	9.13	p<.05

Table 4　一般学生コミュニケーションスケール得点変化

	授業前	授業後	
社交性(24)	18.17	19.46	p<.05
対人過敏性(20)	13.50	14.08	
集団への適応(12)	7.67	8.75	p<.05
アサーティブネス(28)	19.25	21.08	p<.01
親との関係(8)	6.04	6.79	p<.001
メディア(8)	4.38	4.13	
合計得点(100)	69.00	74.29	p<.01

※いずれも得点が高いほど，よい状態であることを示す

（2）平成20年度
分析対象者は必修科目として受講した医学科2年生75名（平成19年4月と7月と平成20年2月），医学科1年生80名（平成20年4月と7月）自由選択で受講した一般学生120名（平成20年4月と7月）とした．質問紙は，フォローアップ調査も行うため平成19年度と同じものを使用した．
体験的，実践的に学ぶヒューマン・コミュニケーション授業は，一方通行的な授業ではないため，学生にとって新鮮であり，青年期にある学生の自分づくりや対人関係づくりの支援になっていることが推察された．一方，対人交流を表面的にやり過ごしたい者にと

っては，刺激が強くマイナスに働く可能性も窺われた．今後の展望として，医学科学生は必修授業であるため，自らが選択して活動する内容を取り入れたり，1 年 4 月時点でのデータをもとに，サポート体制をとること，効果を測定する尺度の改良が必要と思われた．

(3) 平成 21 年度

主な研究として，2 年間の調査を基に改良した質問紙を平成 21 年度入学者に実施し，効果研究を行った．

質問紙は(1)簡易版・大学生生活チェックカタログ 45（峰松ら,2002）から「対人関係」「将来の展望」「生きがい」「大学生活の全体的充実感」 (2)九州大学コミュニケーションスケール（峰松ら,2001）から「対人過敏性」「集団への適応」「アサーティブネス」(3)自己受容尺度（大出・澤田,1988）(4)他者意識尺度（辻,1993）から「内的他者意識尺度」(5)「自分の話し方，きき方の検討」（星野,2003)を参考に作成した尺度の 5 つを用い，授業が学生の対人関係，話し方，きき方及び自己受容に及ぼす効果について検証した．

医学科生は，「きき方」の得点が有意に上昇したが，一般学生は有意な変化はみられなかった（Table5）．一方，一般学生は，「集団への適応」(Table6)，自己受容尺度の得点が有意に上昇したが，医学科生は有意な変化がみられなかった（Table7～10）．一般学生が有意に上昇した項目については，一般学生の 7 月時点より，医学科生の 4 月時点の得点が高かった．「ヒューマン・コミュニケーション」授業の効果は，授業形態や受講生の特徴により，効果が異なっていることが窺われた．この結果については，医学教育学会で発表予定である．

並行して,平成 20 年度入学生に対しても，継続して質問紙調査を行っており，その結果もまとめて発表する予定である．なお，今後も引き続き調査と分析を行い，さらに検討を行っていく．

Table 5

きき方	医学部生(82名)		一般学生(60名)	
	4月	7月	4月	7月
平均値	25.7683	26.4756	25.5667	25.9333
標準偏差	2.2377	2.3952	2.4520	2.4281

医学部生　4 月＜7 月（p=.0321）

Table 6

集団への適応	医学部生(83名)		一般学生(59名)	
	4月	7月	4月	7月
平均値	7.7590	8.0120	6.0169	6.6949
標準偏差	1.7671	1.8465	1.7802	1.9680

一般学生　4 月＜7 月（p=.0013）

Table 7

自己への好感・満足	医学部生(82名)		一般学生(59名)	
	4月	7月	4月	7月
平均値	17.0610	16.5122	14.8644	16.7288
標準偏差	3.1248	3.6098	3.8640	4.0162

一般学生　4 月＜7 月（p=.0000）

Table 8

他者への貢献	医学部生(83名)		一般学生(60名)	
	4月	7月	4月	7月
平均値	10.9880	11.1205	10.7541	11.5410
標準偏差	1.9481	2.2193	2.3375	2.4799

一般学生　4 月＜7 月（p=.0021）

Table 9

自己に失望しないこと	医学部生(83名)		一般学生(60名)	
	4月	7月	4月	7月
平均値	7.2410	7.3012	6.1167	7.0000
標準偏差	2.1033	2.0869	1.9840	2.0656

一般学生　4 月＜7 月（p=.0002）

Table 10

自己への自信	医学部生(82名)		一般学生(58名)	
	4月	7月	4月	7月
平均値	14.4634	14.4146	13.1034	14.1552
標準偏差	2.3951	2.7362	2.9401	3.0614

一般学生　4 月＜7 月（p=.0010）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①吉岡和子　ヒューマン・コミュニケーション授業の効果研究（1）　福岡県立大学人間社会学部紀要　査読無　18 (2) 2009　43－51

②菊浦友美・吉岡和子　青年期の対人関係における攻撃性の表出とアサーション及び自己評価との関連 福岡県立大学人間社会学部紀要　査読無　18（2）2009 53－63

〔学会発表〕（計 6 件）

①高塚人志・河合康明・中野俊也・白石義光・吉岡和子　鳥取大学におけるヒューマン・コ　ミュニケーション授業の効果研究 -QOLL（Quality of life & Learning）を中心に-　　第 41 回日本医学教育学会大会 2009 年 7 月 25 日　大阪

②吉岡和子・田中克江　ヒューマン・コミュニケーション授業の効果研究－QOSL（Quality of Student Life）を中心に－ 日本心理臨床学会第 27 回大会　2008 年 9 月 3 日　東京

〔図書〕（計 1 件）

吉岡和子・髙橋紀子編著　ナカニシヤ出版　大学生の友人関係論－友だちづくりのヒ

ント　2010　138 ページ

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
吉岡　和子（YOSHIOKA　KAZUKO）
福岡県立大学・人間社会学部・講師
研究者番号：30448815

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
田中　克江（TANAKA　KATSUE）
福岡医療短期大学・保健福祉学科・教授
（2007）

高塚　人志（TAKATSUKA　HITOSHI）
鳥取大学・医学部・准教授
（2007-2009）